

クローブ柄の絞り染め胴服

16 世紀から 17 世紀にかけて、ここに展示されているような装飾的な衣装は、裕福で影響力のある領主から配下に、彼らの奉仕に対する感謝のしるしとしてしばしば贈られました。この胴服は、黄色の絹地に木綿の裏地を施し、絞り染めの赤の横線 3 本に鋸歯状の縁取りを施されています。赤い線の中で、どちらも白地に黄緑色の六角四弁菱形花の文様が桔梗文様と交互に施されています。黄色の部分には、紫、白、黄色の色合いの大きなクローブ模様が施されています。染色技術は当時の職人技の最高峰であり、絹や色染料をふんだんに使用していることから、相当な費用をかけて制作されたことがうかがえます。

この胴服は、1603 年から 1867 年まで日本を統治した徳川幕府の始祖である将軍徳川家康（1543–1616）が、安原伝兵衛という名の鉱山経営者への贈り物でした。1603 年、石見銀山の安原の坑道から 13.5 トンの銀が産出され、幕府に献上されました。その貢献が大きかったために将軍が謁見し、その際にこの胴服が贈られました。この胴服は、石見銀山をはじめとする各地の鉱山の貴金属生産量に財政が左右されていた政権にとって、銀山の重要性を思い起こさせてくれます。ここに展示されている胴服は複製です。現物は重要文化財に指定されており、京都国立博物館が所蔵しています。